

# 「作品に恣意を持ち込まないで読む」ということ

—— 一首の歌の解釈をめぐる ——

古 庄 ゆ き 子

万葉集卷二に

大津皇子、石川郎女に贈る御歌

一首

107 あしひきの山のしづくに妹待つとわれ

立ち濡れぬ山のしづくに

石川郎女、和へ奉る歌一首

108 吾<sup>あ</sup>を待つと君が濡れけむあしひきの山のしづくに成りますものを

(岩波日本古典文学大系

「万葉集」一)

という歌がある。

この歌の読み方について最近気がついたことがあるので書いてみる。

といっても大したことはないのだが、この歌、特に「わたしを待つ」と言うので、あなたが濡れになった筈の、その山の雫になつたらよかつたわ」という石川郎女の歌の受けとり方、よみ方の問題である。具體的に言うと、この歌は従来、そうして今でも恋する男性にテンメンたる情を抱いている従順な女心を愛じとるのが普通的那样であるが、その受けとり方に対して疑問を差しはさみたいと思うのである。

疑問をはさむ根拠と言えはすごく簡単で

この歌の成り立ちがそもそも独立した短歌ではない、従って一人の詠嘆として受けとるべきものではないのではないかという事だ。

言いかえればこれは一〇七の大津の歌に和える歌として、それとの呼応によって出ている歌だということを、この歌から恋する男へテンメンたる情を抱いている従順な女心を感じる人々は忘れてはいないかということでもある。

この様な事は改めて言わなくてもわかっていることで、誰しも先刻承知しているはずである。それに問題はない。にもかかわらず、実際の受け取り方においては、二首の呼応が表面的意味の上だけで理解され、いわば二首相互の間の呼吸、はずみにおいて把えられている場合が少ないのはどうしてであろうか。更に言えばそうした人々は大津と石川郎女との歌にある即興的なことばのぶっつけ合、かけひきをみないで、それぞれを自己の詠嘆の表現としか受けとっていない様に思う。私はそう思ったこの歌のよみ方に疑問を感ずるのである。

私はこの二つの歌をまぎれもなく掛合の

歌、二首がそれぞれ相手にからみ、つきはなし、反挽し、対話し合う関係にあるものとして把えるべきだと考えるものである。とすればどうなるか。

一〇八番は一〇七番と並べておいた時、決して従順な女心などのべてはいはしない。むしろ一〇七番の大津の生まじめないささか熱っぽい訴えを軽くかわし、「あらずみまにせんでした。あなたのぬれたというその平になりたかったのですわ」とつきはなし、肩すかしを食わせているのが見えて来るように思うがどうであろうか。それは両方の歌を並べておいた時おこるその間の呼吸みたいなものの中から感知されるものだ。

もちろんいなし、冷かし、肩すかしを食わしたといっても男の訴えを馬鹿にしているのでも何んでもない。いなし、冷かし、ふざける形をとる事でより熱っぽい間柄を思わせるもののように思う。そこを把えるのがこの歌の正統なあり方ではないかと考える。

そこで考えるのだが、どんな好きな相手でもお互面とむかっつての二人だけの場でこんな歌をうたい交わすであろうか。

二人のこの歌にはまさに即興のものでなければならぬはずが見られる。(「妹待つとわれ立ち濡れぬ」と言えばすぐに「吾を待つと君が濡れけむ」と受けるところなど)しかも相手の心を引くようなオーバーな表現、ふざけながら相手へ切りかえすことばなどをみても、この歌が作られ、うたわれた場が当然問題になって来なければならぬだろう。私は今仮りに歌垣の場、又はこれに類するものをこの歌の背景において考えてみている。そうすれば前の様な、一対一の場合不都合だったことが一挙に取り除かれるように思ってもいる。もちろんこれは仮りに話であり、もっともっと精密に考えてみなければならぬことである。

この歌についてのこの様な考え方、つまりこの二首を一組のものとして読むべきだという事を故折口信夫氏が言っておられるのを最近知った。そこで私は私の新発見も見すてたものでもないと思つたし、同時にすぐれた先人というのは私など凡なる後学の考えそうな事はとく々に知つてござるという絶望感みたいなものに陥ちいらざるを得なかった。

折口氏はそこで「古典は其自身の作られた時代——出来るだけ其時代らしい解釈を立て前としなければ、一切むだことになる」という立場から、万葉の相聞歌を、一人の詠嘆の表白になつてしまつた後代の和歌の注<sup>二</sup>など「知らず識らずの間に、自分や自分の持っている時代の文学に近づけて古典を解釈している」の<sup>注一</sup>に改めて気付かせられるのである。これまで私は古典を恣意的に読んではいけないということをかたかだか訓詁注釈(これだつて大変なことだが)の面とか、作の社会的背景を知ること位にしか考えていなかったのであるが、改めて作品の形——ジャンルといったものにまで行き当る(折口氏はそんなことばはつかつておられないけれども)——をその形において読むという深さにおいてそれが理解させられて来たように思う。

注一 折口信夫著「万葉集の恋歌」——「恋の座」和木書店刊 P 90

注二 右同

○ 文学作品を批判又は鑑賞するという時、

大まかに言って

一、読み手が自分の印象や作品から呼びおこされる自分の連想やをる。述べるもの一、なるべく作品そのものに即して読み、分析・評価し、文学史の中に位置づけようとする行き方

の二つの態度があると思う。

この二つの中、前者、つまり作品をだしにして自己を語るやり方は、作品を客観的対象として自分に対置せず、作品は自分を語るためのだしでしかないことよってそれに組しない人々も多い。ともかく表題の様なテーマの場合、対象から一応除いていよかろう。問題は科学性を標榜する後者の場合である。ここでまず文学作品（外ならぬ文学作品を）を科学的に読むという事はどんな読み方をいうのか、それは可能な事なのかどうか、あるとすればどんな方法においてであるかが問題としなければならなからう。

といつても私は何もここで文学が科学性を全くうけつけない絶対的なものとか、天才・魔神の仕業だとか言おうとしているのではない。むしろ、天才にしろ、それは

まぎれもなく人間の作ったもの、しかも一定の時代とか環境とかの制約を受けた人間の作ったものとして作品を把え、出来るだけ作品の本質に迫る批評なり鑑賞なりの仕方があるべきだという風に考えているし、その方法をわたしなりに手さぐりしているものだからこの様な問題を出しているのである。ただ科学性という場合、文学作品を読むに当っては読み手の自分自身というものを抜きに出来ないというやっかいさとかく切り捨てたがる点を指摘したいあまりに、ややまわり道をしているにすぎない。

文学作品を読む場合、私たちは一般にそれがすぐれていれればいるほど全人格をかけて読むこと作品から強制される。ここで全人格をかけて読むというのは、その読み手の生きて来た歴史を総動員するというほどの意味である。

従つて極端に云えば同一作品に対して百人百色のよみがあると考えねばならない。文学作品に対して訓詁注釈の接近をしない限りそれはさけられない事であろう。ここまて来るとはじめに軽く流した作品をだしに自己を語ろうとする読み方はなかなか

有力なものであるし、そうそう死んだとは言い切れないくなるのだ。

それでは作品を全く読み手の側の恣意にまかせ放しにするのか。そうではない。一方、作品はそういった読み手の側の事情とはかわりなく、それ自身独自の構造、客観的性格を持っている。

文学の科学は、この様な百人百色の読みさえ可能だということを一方に持ち、一方にしかもそのような恣意とはかわらない客観的なものとしての作品がある。この二つ背反を統一的に把えるところに築かれむばならないと私は考える。

文学作品を科学的に読むということは恣意を入れないということであるなら、それはもともと出来ようもない事だといった方がよかろう。例えば万葉集・源氏物語等の読まれ方を考えてみたらよい。どれをとつてみてもそれぞれの時代の代表的恣意を反映させたよまれ方の歴史がある。それはまるで誤読の歴史といつてよい。しかもそれにはある時代の恣意による誤読でありながら、その恣意による誤読が対象の本質に迫りうるものもあることをも入れておかね

ばならない。私は古来の先人達のすぐれた訓詁注釈の仕事に敬意を払うことにかけて人後におちないつもりであるが、この辺になると(文学の創造と享受において占めるその役割)あまり主要な席を与えない方が正当の様な気がする。

くりかえしていうが、文学作品を科学的に読むということを以上の様な意味で恣意を入れたいということと取るなら、それはもともと出来得ようのない困難な事なのだとおもった方がよからう。ただわれわれはその恣意のよつて来るところをつきとめ、客観的に位置づけることは出来る。そして恐らくそれを土台にすることによって、客観的なものとしての文学作品の構造なりを解明することの第一歩がはじまるのではなからうか。もともと文学作品を読むということとは語句の解釈注釈をしたりするよりもはるかに全人的仕事、自分の生き方を真正面から問う仕事であるからだ。

われわれは又、ある作品を理解するためにその作品の書かれた時代背景だの、モデルだの、作家の生きた環境だの、交友関係だのいろいろな調べる手続きを知っている

これは作家をその生きた土台の上において理解しようとする優れて進んだ考え方から来ているものと思うが、これらによつても作品そのものは直ちにわかるとは限らないのではないか。

確かに作品はそういった現実を食っている。しかしそれはあくまでも食つて結晶したものである。食物はわれわれのエネルギー源であるが、一度体内でエネルギーと化したものは再び固形の食物にかえれない様に、現実を食つて結晶した作品——とりわけすぐれた作品においては、それが完全燃焼しているし、結晶度が高い——は、それ自身現実に還元できないもの、それ自身完結した世界・秩序を持っているはずである。

従つて彼の生活の部分がわかつたからといって、そのまま作品の世界なり、秩序なりがわかるはずはないと言えよう。

われわれが文学作品を恣意的に読んでほならないということの中には、訓詁注釈の面で正しく読むということ、又、時代背景抜きに読むなどという面が重要な項目としてあると思う。そしてそれはそれとして役割

を限定すれば正しい考え方である。しかしそれよりもより根本的な問題はその作品そのものの作品としての構造、成り立ちを恣意的にでなく、本質にそつて把えて読むということでもなければならぬのではないか。